

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2018年3月 86号



〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com
http://keaf-japan.com

《第7回サッカー教室の報告》

カンボジアでの第7回「サッカー教室」は2017年12月23日から31日まで、例年通りに支援各学校と養護施設、体育教員養成学校などなど11カ所で開校しました。コーチはKEAF支援団体の小林茂さんと群馬・渋川高校の大塚達夫先生。コーディネーターに事務局の岡宮喜雄さん。帰途は現地を深夜出発して元日早朝に成田着という大変な日程でした。お疲れ様でした。小林さんと大塚さんに報告をお願いしました。

小林さんはKEAFの支援団体である千葉・八街アカデミック・スポーツクラブ代表理事・日本サッカー協会キッズインストラクター。「サッカー教室」支援のための「チャリティ・サッカー大会」を既に2回開催してくれました。

大塚先生はこれまで6回の「サッカー教室」でコーチを務めてくれた渋川青翠高校の小林俊文先生の教え子で、やはりサッカー指導の専門家。昨年に続いて2回目の現地指導でした。(写真はコンポントウラバイ高校サッカー部)



参加者が多すぎて嬉しい苦労

サッカーが人気ナンバーワンに

小林 茂

2017年12月9日間で10校を巡りたくさんの子供たちと触れ合いました。前回、私がカンボジアを訪れたのは2013年で今回4年ぶりの訪問となりましたが、カンボジアはこの4年でめまぐるしい発展を遂げていました。サッカーでいうと普及が進んだということ。4年前はサッカーボールを見ても、サッカーというスポーツがどんなものか知らない子供がほとんどでしたが現在ではサッカーが子供たちの人気ナンバーワンスポーツ。

それを象徴するように郊外にもサッカー場、フットサル場が多く建設されていました。マーケットではユニフォームがたくさん売られていてユニフォーム姿の子供を多く見かけるようになりました。

また車の台数が異常に増えたこと。それにともないガソリンスタンドも増えていました。バイク中心だった4年前と比べて明らかに乗用車の数が増えプノンペン市内は連日渋滞が発生しています！

(2頁へ続く)

貧しさの中にある幸福

日本では味わえない感動

大塚 達夫

昨年に引き続き、2回目のカンボジア訪問、今回は、KEAFの岡宮さん、八街サッカークラブの小林茂さんと新たなメンバーでの訪問となりました。1年ぶりなので見慣れた光景が多く目に飛び込み、懐かしいと感じながらも随所に変化が見られました。

首都プノンペンは、益々開発が進み、近代的な建物、飲食店も多くなりました。工事中だった国道1号線は、完成し渋滞が緩和され、宿泊したOV・HOTELのオーナーがフランス人に代わり、昨年何も無かったホテルの隣には、おしゃれなカフェバーができていて、夜遅くまで若者で賑わっていました。

我々の訪れた田舎の学校も新校舎の建設が進んでいて、わずか一年での変化に驚きました。しかし、発展と同時に広がる経済格差、近代化する若者文化、中国企業の極端な進出など、変化が激しいだけに危うさも感じました。そんなことを感じながらカンボジア南東部に位置するプレイヴェン州へ向かい、サッカー教室が始まりました。(3頁へ続く)

〈1 頁右段「小林茂さん報告の続き」〉

地方でもマーケット、スタンドが増え日用品のほとんどが手に入るようになっていました。このような急速な発展を遂げてはいますが、首都と地方の格差、貧富の格差が広がりつつあるのを感じました。

プノンペンでは高層階の建物がどんどん増え日本の高級車をよく目にしますが、郊外にいけば未だにバラックから抜け出

せない人も多くいますし、農村地域の生活水準の低さは見ているだけでも理解が出来ました。

また学校に未だに通えない子供たちもいて、巡回中にも汚れた貧しい服装で学校に通えていない子供たちがサッカー教室の様子を眺めにきていました。この辺はカンボジアの政治なので我々日本人にできることは限られている。

ファン優先 の指導

今回もサッカー教室ではたくさんの子供たちが参加してくれ逆に人数が多すぎて苦勞するぐらいでした。人数を制限して行うこともできましたが、なるべく多くの子供たちに体験してもらいたい。サッカー教室のクオリティー（質）よりもファン（楽しむこと）を優先し小学校ではあえて人数制限をせず、すべての子供たちを受け入れました（写真上：プレイトープ小学校で）。

結果的にトレーニングが進まなかったり、子供

たちに話が届かなかったりと問題点もありましたが、たくさんの子供たちがサッカーに触れ、身体

を動かす楽しさを伝えることが出来たと思います。

身体を動かす楽しさを伝えられれば、自ずと子供たちの遊ぶ機会スポーツする機会が増えてくると思います。現に町を移動しているとサッカーしている子供を多く見かけるようになり

ました。この子供たちの遊び・スポーツの普及はKEAFの7回に及ぶサッカー教室も大きく貢献していると感じました。

サッカーは国を変える

現在の日本サッカー発展の陰にも日本各地で50万人を超える子供が参加したセルジオ越後氏の

のサッカー教室の貢献度は大きいのです。

その昔ブラジルから来たセルジオ越後氏が日本にサッカーを普及させたように、KEAFの地道な積み重ねが、子供たちの良い経験となり、その良い経験を得た子供たちがサッカーだけではなくカンボ

ジアの未来を大きく変えるかもしれない。

その願いも込めて今後もカンボジアサッカー教室が長く続くことに期待したいです。（写真下：プノンペン北郊外の体育教員訓練学校でサッカー指導法を教える（写真左：通訳のコウタロー君・日本名のニックネーム）。



(1 頁「大塚達夫さんの報告」の続き)

当初は言葉や文化の違うカンボジアの子供を指導することへの不安はありましたが、いざ、サッカーが始まってみると不安はどこ吹く風、どこの学校に行っても子供たちの歓声が響き渡り、夢中になって走り回り、ボールを追い、真剣な表情で我々の話に聞き入る姿が見られ、サッカー教室は、大盛況のうちに終わりました。「子供たちの喜ぶ姿が、こんなにも自分に幸福を与えてくれる」そう実感し、日本では、味わったことのない不思議な感動がありました。

相反する2つの豊かさ

プレイトープの学校へ行ったときのことです。お昼の休憩時間、私は子供たちのいるところへ行き、さっそうとボールリフティングを始めました。すると子供たちが自然と集まりました。次に身ぶり手ぶりで、じゃんけんをさせ、ミニゴールを置くと、いつの間にかサッカーのゲームが始まっていました。言葉は通じなくてもボール一つで友達になれた瞬間でした。サッカーの魅力と可能性を改めて感じた瞬間でした (写真)。

何もかも満たされた日本の子供たちにはない、カンボジアの子供たちの純粋さとエネルギーを目の当

供たちの笑い声が響き渡り、人々が助け合い、家族が共に過ごす。カンボジアの田舎で見られる光景を見ていると必ずしも発展することが正解とは言い切れないと感じます。(写真：プロモルプロム高校で)



後片づけも自分で

7 年前に始まったサッカー教室、当初は、サッカーのことを全く知らない子供も多く、その場で立ちすくむ子供も多かったと聞いています。今では、カンボジア国内のサッカーの盛り上がりで、地方の子供たちのサッカーへの関心もかなり高まってきており、子供たちの中には、サッカーの上手な子も何人か見受けられるようになりました。子供たちの話を聞く態度、空のペットボトルを片付ける習慣、サッカーの準備や後片付けを手伝ってくれる子供の姿など、子供たちの成長とこの活動の地道な成果も実感できました。

今回は、2回目の訪問となり、あらためて「貧しさの中にある幸福」を味わうことができた旅であったと同時にカンボジアの抱える問題も多く見えた旅でした。KEAFの岡宮さん、共にサッカー指導をした小林茂さん、そして現地の通訳さん、運転手さん、充実したサッカー教室ができたことに大変感謝申し上げます。今後もこの活動が続いていくこと、カンボジアと日本の絆がより深まることを願っています。



たりにするとあらためて物質的な豊かさと心の豊かさは相反することを思い知らされます。時の流れがゆったりと流れ、人々の生活がむき出しで見え、子

強権体制、さらに固める

“革命王”の生まれかわり自任
フン・セン氏、危機突破図る

カンボジアではフン・セン首相のさらなる強権体制固めが進められている。有力野党の救国党を昨年11月解党に追い込んだうえで（会報84、85号参照）2月25日に実施した上院選挙で、58議席の全てを与党・人民党が独占した。残る4議席は国王と下院がそれぞれ2人ずつ指名する。

国際批判無視の上院選

欧米諸国の政府ばかりか、近隣の東南アジア諸国連合（ASEAN）の国会議員らでつくるASEAN人権議員連盟も、民主的な選挙とは認められないと警告していたが、無視された。

7月には下院選挙が予定されている。下院では人民党68、救国党55と拮抗していたが、救国党解体後に同党議席は既に人民党に配分されており、7月の下院選挙を待たずしてフン・セン首相・人民党の1党支配体制が整った。

下院は上院選挙の前に国王不敬罪を新設する法案を採択、上院もすぐに承認することになる。カンボジアでは仏植民地時代から大戦後の独立、ベトナム・カンボジア戦争、ポル・ポト恐怖政治と内戦時代、と苦難の時代を生きたシアヌーク前国王の人气が高かった。息子のシハモニ国王時代になっても、不敬罪を必要とする状況があるとは思えない。なのに、なぜ？首相は国王が任命することになっている。だから首相に反対することは国王に反対することになる。それは許さない—権力者は実は臆病で、身を守るためには何でも使うということだろうか。

16世紀に「民主主義革命」

だが、フン・セン首相の野心はもっと大きいという話もある。ニューヨーク・タイムズ紙が最近、こんな記事を掲載した。カンボジアの歴史には、

16世紀に反乱をおこして一時、王権を握ったステク・カンという人物が登場する。歴史学者は単なる王権篡（さん）奪者とみるが、フン・セン氏はカン王を民主主義革命家と称賛。出身地が同じカンボジア東部のベトナム国境に近い地域ということ、自分自身もポル・ポト恐怖政治で知られるクメール・ルージュに造反し、独裁者に上り詰めたという相通じる経歴もあってか、自分をこのカン王の生まれかわりに見立てて、当時の都の跡地に寺院を再建したり銅像を建てたりした。

続々と銅像

フン・セン首相は公式のスピーチで、カン王が

下層民を解放して自由を与えるなど、マルクスに数世紀も先立つ民主主義革命を実現したとして、自分の統治の手本にしていると述べている。フン・セン支持の金持があちこちにカン王の銅像を建てはじめ、この数年でその数は7つに達したという。

昨年8月にはフン・セン首相に近い大金持ちがスポンサーになった映画「サデク・カン殿下」が大々的に封切られた。

カン王の民主主義賛美キャンペーンの裏側で、フ

ン・セン政権は弾圧を避けて海外亡命を余儀なくされていた野党・救国党のサム・レンシー党首の逮捕状を取って帰国を不可能にし、次いで後継党首に就いたケム・ソカー氏を米国と共謀して政府転覆を企てた反逆罪容疑で逮捕、主要な党員の政治活動を禁止して、同党を解党に追い込んだ。

危機感、トランプ効果

フン・セン首相が2017年に入って野党や反政府勢力弾圧を一気に強めたのは、2013年の下院選挙、続いて同16年の地方選挙で救国党の躍進に加え若者を中心に政府批判の世論が高まったことで、このままでは2018年下院選挙はできないとの危機感がある。識者や反政府派は、米国でトランプ政権が登場したことがフン・セン政権を勢いづかせたとみている。（金子）



ありがとうございました (2017 年 11 月 25 日～2018 年 2 月 23 日)

年会費、寄付金、奨学金をお振り込みくださった方々に心からお礼申し上げます (敬称略させていただきます)

(東京) (神奈川) (東京) (大阪) (東京) (東京)
(神奈川) (神奈川) (神奈川) (千葉) (神奈川) (東
京) (東京) (神奈川) (東京) (神奈川) (神奈川)
(福島) (東京) (東京) (群馬) (東京) (神奈川)
(神奈川) (奈良) (東京) (京都) (東京)
(神奈川) (東京) (東京) (千葉) (東京) (東京)
(東京) (東京) (東京) (宮崎) (埼玉) (埼玉)

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています ※写真つき奨学生紹介の 4,5,6 頁は個人情報保護のため省略

素晴らしかったけど震え上がった

常夏の国から札幌雪まつり観光 ナットさんと香ちゃんの初体験

カンボジア現地で支援活動をするとき、学校訪問の日程の事前調整に始まって車の運転、通訳、ホテルの手配まで助けてくれるのが公式日本語観光ガイドのソワンさんとそのファミリーの皆さん。ソワンさんの甥で補佐役のナットさん(下の写真の真中)と愛娘おおり(香)ちゃん(左)にナットさんの友人(右)が加わった3人が、2月上旬に札幌の雪まつり観光にやってきました。(写真: KEAF のみんなと懇談)

常夏の国カンボジアから厳寒の札幌へ。素晴らしいペイジェントだったけど、予想を超える余りの寒さに震えあがったそうです。それだけに定山溪の暖かい温泉は有りがたく、ゆっくりと楽しんだとのこと。大雪と温泉という日本を代表するスポットの初体験を嬉しそうに話してくれました。

ソワンさんファミリーのことは 2013 年 6 月の会報 67 号で紹介したことがあります。そのとき香ちゃんは小学校 4 年生。今は中学 1 年生です。可愛らしい少女に成長しています。1 歳違いの弟・金太郎君は小学 6 年生になりました。

ソワンさんは大の親日家で、カンボジアの日本語通訳の草分け。奥さんのソフィアットさんに加えて親族の若者たちを家に引き取り、最高学府のプノンペン大学日本語学科に入れて日本を勉強させてきました。ソフィアットさんもナットさんも見事な日本語の使い手です。

2 人は皇太子殿下が 2012 年にカンボジアを訪問した際には一行の案内役を務め、学生だったナットさんは皇太子殿下をプノンペン大学に迎えた時には、学生代表として歓迎挨拶をしました。いまは幸太郎君と呼んでいる甥がやはりプノンペン大学日本語学科にいて、日本語を急速に身に付けています。独立してカンボジア有数の日本語通訳になっている甥もいます。今回は留守番だった金太郎君と、まだ修行中の幸太郎君もいずれ日本にくる機会があるでしょう。しかし、ソワンさんは残念なことに、飛行機が怖いから日本には行けないと言っています。

